

「ピロリ菌除菌を軸とした新しい胃がん予防戦略」

—企業のマーケティング手法を活かした「がん施策」を—

*はじめに

今回のフォーラムでは、これまでの自分自身の最前線での多くの普及啓発活動の経験から、自治体・健康保険組合（企業）等での「がん対策」に取り組むスタンス（考え方／進め方）を、企業の「マーケティングノウハウ」をベースにした実戦的な手法をご紹介します。今後、皆様方のご検討を進めるに際しご参考になればと思います。

*「がん対策」の重要性

「国」はがん対策を喫緊の国家的課題と位置づけ、特にその中でも科学的根拠に基づいた有効な「予測」「予防」「早期発見」「早期治療」の更なる向上策の実現、更に「がん教育」は最優先に取り組むべき重点施策として法的（*）にも明確に明示されています。

*「がん対策基本法」・「がん対策加速化プラン」・「全国がん登録法」等。

*「胃がん対策」の経緯

胃がんは1982年に胃の粘膜から培養された「ピロリ菌」という細菌の発見によって、胃がん対策の概念が根底からひっくり返りました。

その後の研究で1994年にはWHO（IARC）は、ピロリ菌は「たばこ」・「アスベスト」の同等の第1級の発がん性物質（発癌因子）として認定しました。このことは、今後の胃がん対策はこれまでの「生活習慣病由来」から「感染症由来」の疾患として根本的な対策をすべきとの世界レベルでの大きな方針転換です。胃がん大国である我が国の研究陣は、ピロリ菌と胃がんの因果関係、感染検査・除菌療法等の有効性を科学的に極め、2013年2月には世界に先駆け、「ピロリ感染胃炎に対する除菌療法の保険適用の拡大」に至りました。この決定に世界中の医学会が驚嘆したのも事実です。

*「胃がんリスク層別化検査」の有効性

これからの胃がん対策は「早期発見」「早期治療」を主とする「対処療法」から「予測」「予防」を重視する「病因（原因）療法」が「Best&Must」になりました。

「胃がんリスク層別化検査」の目的は、微量の血液での胃がんの「発見」ではなく、胃がんの「発症リスク」を判定する科学的根拠に基づいた検査法です。

現時点では実績面からも本検査の採用を抜きにした効率的で有効な「胃がん対策」は考えられません。

*お問合せ：fwhc26921947@m02.itscom.net

以上

